

○書き下ろし歌謡曲  
(岩波新書刊) 阿久悠著  
椎窓 猛



去る8月2日、死去の  
作詞家阿久悠氏の追悼記  
事はどこの新聞もかなり  
のスペースをさいて掲載  
していた。昭和戦後の時

代を歌謡をとおして熱っぽく歌いあ  
げた作詞家といえよう。「宇宙戦艦  
ヤマト」「北の宿から」「舟唄」と  
幅広い歌謡を生みだしている。青森  
へ旅をしたとき、竜飛岬に立つ歌碑  
から流れでた石川さゆりさんの「津  
軽海峡冬景色」のメロディは印象深  
いが、これは阿久悠の作。ここにと  
りだした彼の歌謡曲論は1997年  
の発行。

「まったく新しいカルチャーとの  
遭遇というかたちで、戦後、歌謡曲  
を受けとめたのです。僕にとっては  
歌謡曲は情報でした。世の中で何が  
はやっていて、人々はどのような感  
覚で生活していて、どういう人がす  
てきに思われているか——それは全部  
歌謡曲で知ったんです。——」と少  
年の日を語る彼。彼は淡路島に昭和  
12年の生まれ。

黄櫨の会・自分史図書館だより



平成19年8月10日 筑後市野町428-8  
〒833-0032・TEL 0942-53-8122

これは世につたえておきたい  
かたっておきたい  
わが胸の底から真実のおもい  
人生幾山河めぐりあい  
あの日の風やひかり そして空のひとひら  
哀歓のかがり火に生きた幾年月の路  
「自分史図書館」は その証言館です。

○近代大牟田の明星派歌人  
白仁秋津の世界  
白仁秋津を顕彰する会発行



この会を代表される大  
城美知信氏は刊行にあ  
たって「最近では白仁秋  
津の名を知る人も少  
なくなりました。秋津  
は本名勝衛、明治の  
後期から大正、昭和  
にかけて活躍した郷

土の歌人。「明星」派の与謝野鉄幹、  
妻晶子に師事、若き日の北原白秋  
とも親交があり、有名な「五足の靴」  
文芸紀行を背後から支えたが、大正  
12年から昭和12年まで15年間も、  
旧銀水村の村長もつとめ、地域  
振興にも貢献……」とプロフィール  
が語られている。

- 恋人のたまへる虫おえる児の  
喜ぶよりも嬉しかりけり
- 福岡の名島の浜の真砂子より  
君の瞳は美しきかな
- 秋の日は瞳を閉ぢぬ悲しげに  
風ぞ過ぎ行く巾ひの如
- 古き代の木に巣くひたる人のごと  
枝に上りて柑子をば採る
- 阿蘇を出て肥の国を吹く青あらし  
天草島にしら浪をあぐ

### 句集 八女津媛

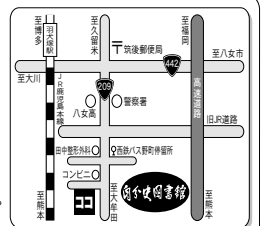
西江 和子

願ひごと人それぞれや星祭り  
陽に焦げしひまわりの種うつ向けり  
歯が生えし便り読み合ふ秋の昼  
うづ潮を覗く冬帽を真深くし  
涼風の影と思ひし城下町  
全身で笑むみどり児や秋麗  
秋空や組体操の肩に雲

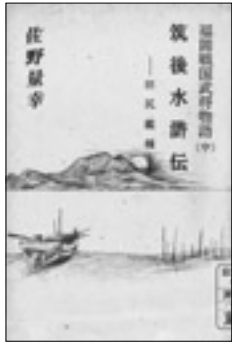


### 自分史図書館

入館無料  
開館 午前9時～午後5時  
閲覧希望の方は予め電話で  
ご確認下さい。  
貸し出しはしていません。

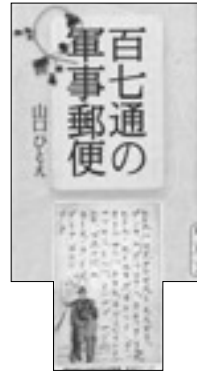


〒833-0032 筑後市野町423-8 TEL・FAX 0942-53-8122  
西鉄バス野町停留所より徒歩5分  
インターネットでもご覧になれます。http://www.jibunshitosyokan



○福岡戦国武将物語  
筑後水滸伝一田尻鑑種  
佐野 量幸

著者佐野さんは、まえがきに、「一方、乗じること  
に失敗、古城と共に忘れさら  
れ、歴史の流れの中に埋  
没した武将も多い。しかし  
それでも古戦場や古城の跡  
などを通して、甦ってくる  
彼らの情熱は、今なお私た  
ちに強く訴えかける一」と  
述べられている。その武将  
の一人田尻鑑種が語られて  
いる。「筑後を制する者が  
九州を制する」大友、島津  
竜造寺が一目おいていたの  
が田尻鑑種。鷹尾城をかま  
え水軍をひきいた勇将の物  
語。



○百七通の軍事郵便  
山口ひとえ（文芸社刊）

「私の父山際正司は昭和  
16年、私は4歳、妹2歳、  
弟は生後6ヵ月、母は父と  
同じ30歳、このとき宮城  
県の部隊へ召集出征、フィ  
リピン、マライ、ジャワ、  
ビルマと転戦、インパール  
作戦に参加、九死に一生を  
得て復員、平成7年83歳  
で死去したが、山口ひとえ  
さんにとっては戦地からの  
父の便り107通が、戦争  
という異常な時代に強い絆  
で結ばれた家族への思い。  
これを子孫に伝えたいとの  
思いでまとめられた一冊。

・家族残して征きたる亡き  
父の軍事郵便読む百七通を

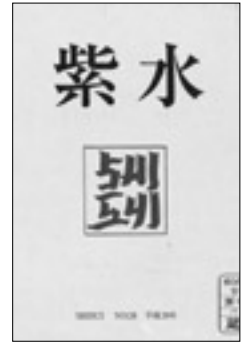


○人生に卒業はない  
吉田 誠子

「四月初め、盛岡から、バ  
スで繋温泉に近づくと御所  
湖の北方に聳える南部富士  
の残雪に赫々と夕映えが美  
しい。感動と共に啄木の詠  
った岩手山の詩を思い浮か  
べる」と書かれた一節があ  
るが、吉田さんは岩手の人。  
昭和2年の生まれ。看護学  
校卒業以来、医療、保健、  
福祉の分野で働き、国立病  
院婦長、助産婦など歴任。  
その間の忘れ難い思い出の  
数々が綴られて感銘深い。

なかでも亡き主人を追憶  
されているくだりには感動  
させられる。56歳で逝か  
れたご主人は歌人でもあっ  
た。

・赤光の彼方に歩をば早め  
つつ去りゆく君に別れを告  
げぬ



○紫水 第28号 発行～紫水会  
編集人～秋山喜文

発刊のたびごとにご惠贈  
の「紫水」は内容豊富。

森山靖章さんは旧制高校  
賛歌と題し、五高の逍遙歌  
が紹介されている。

椿花咲く南国の二更は過  
ぐる星月夜 檣櫓の森に陽  
は落ちて 歌朗らかに 青  
春の感激深き若き日の誇り  
を永遠に忘れじな

肝臓がん、直腸がん手術  
体験闘病記の西謙次郎さん  
の実直な記録、生きること  
の大切さ重さがありのまま  
に記述されている。

和顔愛語を消してしまう  
インターネット時代評の富  
沢義敬さんの論にも傾聴さ  
れること多大である。まこ  
とに得難い貴重なエッセー  
誌である。

## 編集掌記

▼先月8月号は紹介す  
る書物が少なかったが、  
あとで7冊ほど館長の  
机上に届けられていた。  
一冊ごとに手にするた  
びに人生邂逅、感謝の

念に包まれる。インターネッ  
ト現  
代社会から見て活字の書物を軽視  
される風潮があるが、あれこれ思  
い量るに、書物、本ほど、頼りに  
なるものはない。電気がこなければ、  
インターネットは動かさず……。そ  
こへいけば、本はどこへでも持ち  
はこび出来、明るい場所さえあ  
れば何処でも読むことができ  
る。それを忘れかけている人も多  
い。

▼先日、大刀洗平和記念館を訪ねた。  
このごろ安倍首相は、戦後体制か  
らの脱却などと言っているが、こ  
こを見学すれば、如何に当時の若  
人が尊い生命を散華しなければな  
らなかつたのか――、改めて深く  
考えさせられる。毎月、戦争あの  
時代を思い返す記録は絶えること  
なく惠贈されている。

(自分史図書館長 椎窓)